良人教育十四種

岡本かの子

（1）　気むずかしい夫

何が気に入らないのか、黙(だま)りこくってむっつりしている。訊(き)いてもいっては呉(く)れないで、渋(しぶ)い顔をするばかり。従(したが)って家内(いえ)中で腫(はれ)ものにでも触るような態度を取り、そばを歩くに、足音さえも窃(ぬす)むようになる。こういう性質は神経衰弱その他生理的な病気が伏在(ふくざい)している為(た)めに来ることもあれば、当人の我儘(わがまま)から来ることもある。病気なれば気の毒、早速(さっそく)医者の手にかかるがいいが、もし我儘だったらあんまり卑屈(ひくつ)にへいへいしていると、却(かえ)って増長(ぞうちょう)させていけない。正しいことは相当主張し、快闊(かいかつ)に、はたからその不機嫌を吹

き散らしてしまうがいい。不機嫌は当人も持てあましているのだから、はたからのひょっとした誘いで気が取直せ、当人も助かることがある。

（2）　短気な夫

しじゅうイライラしてちょっとのことにカンシャクを起す。この性質に二つある。外では猫のようにおとなしく言うべきことも胸に畳み、そのシコリを家へ持越して爆発させるものと、もう一つはどこでも短気でカンシャクを起すのとである。前の方のは臆病で気の毒な性質の人ゆえ、まあまあ我慢して家でカン

シャクを起さしてやるのが愛だが、後のは持前の性質ゆえ修養とか信仰とかを勧めて、根本的に直すのが愛である。一たい短気な人は速力が気に入るのだから何でも手っ取り早く先手を打って、先に望むことをしてやれば悦ぶものだ。

（3） 病身な夫

痼疾のあるのは別だが、そうでなくて年中あっちが悪い、こっちが悪いとぐずぐずしている人がある。多くは神経質で思い過しの人に多い。一しょになって心配してやらねば不親切だといってヒガむし、そうかと

いって心配すればキリが無(な)いし、仕末(しまつ)に悪い。心機一転(しんきいってん)ということもあるから、朗(たから)かに奮闘(ふんとう)的な気持ちになれるよう、思い切って生活を革新(かくしん)するとか、強い刺撃(しげき)を与えて心境を変化させるとか、妻自身確信(かくしん)と元気を持って助勢(じょせい)するがいい。

（4）　潔癖(けっぺき)な夫

硝子(ガラス)窓がちょっと曇(くも)っていても気にし、障子(しょうじ)のサンにホコリが溜(たま)ってやしないかと、指の腹で擦(こす)ってみる。ひどいのになると一日に五六度オキシフルか、昇汞水(しょうこうすい)で手を消毒しないと、落付(おちつ)いて仕事が出来(でき)ぬ

というようなのがある。悪いことではないが兎に角うるさい。また精神上の潔癖家として無暗に人を毛嫌いするものもある。あいつはオベッカ者だからとかあいつはウソ吐きだとかいって、口も利かぬ。そんなことをいった日には世間が狭くなるばかりだから一つ気を大きく持たせるべし。

（5）　頭のよすぎる夫

どうせ見透され尽すのですから、なまじい夫に対する心のつくりかざりをせず、正直に無邪気にともに暮すべし。

（6）　交際下手（べた）な夫

交際下手な夫を持った妻は、相手の人が夫の気象（きしょう）を呑（の）み込むまで、妻自身がまめまめしく客にかしずき、その場の調和をたもつこと。

（7）　学者肌の夫

学者は日常他人に教示（きょうじ）する癖（くせ）をもって暮（くら）す。その気持ちのリズムに添（そ）うて、暮さなければ夫の心情（しんじょう）を荒らす。妻も大方（おおかた）のことは生徒になりたる態度をもって、夫に対侍（たいじ）すべし。

（８）　親や親類と折合の悪い夫

いっそ親や親類に悪く云われても仕方がない。まあなるたけ主人の気のやすまるよう遠のいて、身辺の平和を守るか（この際扶養の責任あらば、それだけは物質だけでも果すべし）、さもなくば、妻は身をもって円満に尽し、親、親類に夫の折合い悪しき部分を補うべし。

（９）　失業している夫

妻の身の自分が内職でもして家計を立てようとする

努力とともに、失業状態にある夫の心は、とかくひがみ易(やす)くなっていますから、妻は平常より寧(むし)ろ夫を敬愛(けいあい)する態度に出(い)でよ。夫は心明るく次の職業を探す勇気に向(むか)えましょう。

（10）　大酒家(たいしゅか)の夫

何かほかの嗜好物(しこうぶつ)に転換させるか、もし万(ばん)不可能な時は、妻自身大酒をのむか、但(ただ)しはのみたる振(ふ)りで酔(よ)っぱらって困らせて見せるか、知人の大酔家を、夫のしらふの時に夫の眼の前へ連れて来て見せしめにするかです。

（11）　移り気の夫

正当に警戒（けいかい）し、懇願（こんがん）して見ても駄目（だめ）でしたら、妻自身も移り気の振りをして見せしめてやりなさい。それでもだめならあきらめるか、別れるか、どちらでも。

（12）　家にばかりいる夫

家にばかり夫がいて困るのでしたら、散歩や活動に妻が誘って御覧（ごらん）なさい。嫌だと云ったら妻一人、夫を家へうっちゃって出て寂しがらせて御覧なさい。手のない家でしたら、盛んにお使いでもおたのみなさい。

（13）　家事に口出ししすぎる夫

家事に口を出し過ぎる夫に困ったら、一週間位（くらい）そら病気をして、夫に家事万端（ばんたん）の世話をやかせ、負担に堪（た）えない経験をさせたらどうですか。お客の前などで、だしぬけにあれを出せ、時ならぬ時分（じぶん）にこれはないかと、喰（た）べものなど主婦の予算以外な注文をする夫をこらしめるためには、あとでその時の費用を誇張（こちょう）し、また労力の超過（ちょうか）をしめすため、そら病気でもして見せます。

（14）　職業婦人の夫

職業婦人の夫はそれこそ妻に思いやり深くなくてはいけません。そして自身も職業を持つならば、退（ひ）け時刻の早い方が遅く帰る方を待ちうける用意をして置きなさい。朝、出かけの早い方を遅い方が送って上げるのも同様です。この際昔風な夫、妻、の観念を除き、同じ労力を分（わか）って家事を分担する友、恋人同志であり同時に普通の夫婦以上、妻は夫に与える所の多い女性として尊敬して、夫たる男性の手に適するかぎり家事の労力なども妻の助けとなるべきです。但（ただ）し呉々（くれぐれ）も妻は己の職業に慢心（まんしん）して大切にして貰（もら）う夫に狎（な）れ、かり

にも威張ったり増長せぬこと。月並の戒のようなれど、余程の心がけなくてはいわゆる女性の浅はかより、この弊に陥り易かるべし。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
１９９９（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
１９７６（昭和51）年発行
※「仕末（しまつ）」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００４年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。